

2023 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	英語圏文学作品における性差の分析 ーサイボーグとヒューマノイドを中心にー
キーワード	①英語圏文学、②ジェンダー、③フェミニズム

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	アンボ ナツエ 安保 夏絵
配付時の所属先・職位等 (令和5年4月1日現在)	中部大学・人文学部・助教
現在の所属先・職位等	中部大学・人文学部・助教
プロフィール	文学作品に登場する女性の体と科学技術の親和性を明らかにし、サイボーグのように体を強化する女性たちの欲望や、彼女たちが登場することの意味を現代社会と結びつけて模索しています。特に AI が進化している現代で、ジェンダー観がどのように変化するのかについて研究しています。

1. 研究の概要

アメリカ、カナダ、イギリスの英語圏の現代文学小説における (1) から (3) の描写の変化と今後の可能性を明らかにする。

- (1) テクノロジーによる社会構成の変化——クィア理論を中心に
→非人間 (AI、ヒューマノイド、サイボーグ) とクィア (LGBTQ) の同一視
- (2) テクノロジーによって代替される欲望——トマス・ピンチョンの『V.』『重力の虹』
テクノロジーが性生活に浸透する影響及び戦争とテクノロジーの共犯
- (3) テクノロジーによって変化する出産・再生産——マーガレット・アトウッド 3 部作
 - ① 新しい生殖と出産
 - ② 非人間との共生社会の模索

2. 研究の動機、目的

(1) 文学作品を手がかりにして新たな性のあり方と再生産に着目

カナダ人作家であり環境保護活動家、そしてフェミニストであるマーガレット・アトウッド (Margaret Atwood) のマッドアダム 3 部作 (*MaddAddam Trilogy*) と呼ばれる『オリクスとクレイク』 (*Oryx and Crake*, 2003 年)、『洪水の年』 (*The Year of the Flood*, 2009 年)、『マッドアダム』 (*MaddAddam*, 2013 年) を扱う。アトウッドはディストピア小説と呼ばれる絶望的な世界には必ず希望が描かれていると主張する。特に東日本大震災の後の人々の回復力に希望を見いだして 3 部作を描き終えている (Atwood 2014)。この 3 部作では、COVID-19 を予兆するようなウイルスの蔓延の後、科学者によって生み出されたヒューマノイドと人間が共生する世界が描かれている。その壊滅後の世界のきっかけとなった遺伝子改良や、動物とヒトの細胞を結合する接合 (splice) も扱われている。女性の登場人物たちは人間であれヒューマノイドであれ子孫を残し、ヒューマノイドと人間の間で生まれたハイブリッドな子孫を再生産する重要人物となっている。このハイブリッドという言葉は、ハラウェイのいう異種混在に該当すると考えられる (Myerson 2001)。このような予見的な技術の活用を文学小説から見出すことを本

研究の目的とする。

(2) 人間と人間以外のもの（AI など）との共生関係を模索

本研究は、小説や映画の作品から、人間と非人間との新しい共生関係について分析することを目的としている。身体やアイデンティティの女性性を捨て去ることなしに、新しい性や人間以外の主体をまぜたハイブリッドな存在を作品から読み取る。特に『洪水の年』に登場する女性トビーはテクノロジーを駆使してサバイバルするだけでなく、ヒューマノイドに言語や文化、そして感情を教える次世代の科学者のような役目を果たしている。科学者=男性という固定概念が根強いが、次世代に必要とされる AI トレーニングのコーチのような役割を持つ女性を描いているのではないかと推測し女性と AI との共生にも着目する。

3. 研究の結果

(1) テクノロジーによる社会構成の変化——クィア理論を中心に

→非人間（AI、ヒューマノイド、サイボーグ）とクィア（LGBTQ）の同一視

生身の体を持つ人間の男女のジェンダー論についてジュディス・バトラー（Judith Butler）の『ジェンダー・トラブル』（*Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, 1990 年）の新たな読解として、バトラーの考えるクィアな（LGBTQ の人々）を非人間的な存在と同一視し、マイノリティのコミュニティの在り方について明らかにした。バトラーによると、ジェンダーは政治や言語によって表象される。そしてこの表象が、主体となる人々、すなわち LGBTQ + の人々が社会でどのように見られているのかという視線を決定する。女性解放あるいはクィアの解放という目的のために制度をつくったとしても、その制度そのものがジェンダーを規定してしまい、目的を達成できずに自ら滅びてしまう恐れがある。そこで、バトラーが提唱したのは、男女という枠に当てはまらない曖昧なものがあるからこそ男女の二元論的社会は成立するという逆説である。例えば、その社会の周縁に存在する LGBTQ+ の人々をあえて偽物（パロディ）として主張することでジェンダー規範からすり抜けようとしている。つまり、二元論的な男女の、たった2つの性別によって成り立つ社会というものはそもそも曖昧なものであり、その二元論的な男女の社会の外側、あるいは周縁を生きる者が存在しているということである。そのような周縁の人々は、バトラーが示した社会からの逸脱するクィアな人々である。本研究では必ずしも周縁の人々は人である必要はなく、非人間、半人間、あるいはヒューマノイドといった新しい存在であるとまとめ、非人間的な存在である AI などが社会に溶け込めるような、カテゴリー無き社会を提示した。

(2) テクノロジーによって代替される欲望——トマス・ピンチョンの『V.』『重力の虹』

→テクノロジーが性生活に浸透する影響及び戦争・無機物とテクノロジーの共犯

『重力の虹』（*Gravity's Rainbow*, 1973 年）における性の違いに着目した。特に、ロケットと人間が接続されて一体化している場面は、女性こそ登場しないものの女性的な感情を抱いている青年が登場し、体と感情のバランスが不安定であることが示唆されている。また、『重力の虹』はクロスジェンダーが重要なテーマとなるが、そこに人間が物と接続することで無機物になる欲望が同時に絡んでくる。無機物になる、すなわち、小説では人間がロケットと一体化する、あるいはプラスチック製の服を着て興奮を覚える描写から、無機物化を求める人間たちの死の欲動を考察することが可能だ。この死の欲望、あるいは子孫を残さないという欲望は LGBTQ に根強く関係する。『重力の虹』を通して、人間の無機物化と死の欲動にテクノロジーが深く関係していることが明らかになった。同性愛における死の欲望は、ロラン・バルト（Roland Barthes）が『神話作用』（*Mythologies*, 1957 年）で分析している “plastic-ity” と無機物化を結びつけて援用しながら、逆にその欲望が社会において壮大なパワー、すなわち戦力や生命力になると結論づける。バルトの “plastisphere” の分析では、“plastisphere” は、プラスチックと人間の融合によって新しくつくられた “queer future” の可能性を含んでいることが明らかになった。

(3) テクノロジーによって変化する出産・再生産——マーガレット・アトウッド3部作

①新しい生殖と出産

リー・エーデルマン (Lee Edelman) の『未来は子ども騙し——クィア理論、非同一化、そして死の欲動』(2005年)を確認してみると、子どもは政治や国の繁栄とは切り離せない「未来」の象徴として扱われている。このような生殖的未来主義は、子どもを産むことは社会の未来存続の象徴であることを強く主張している。しかし、これはあくまでも異性愛主義が標準とされている社会での話であり、クィア理論やジェンダー論は異性愛主義的社会に対抗するもの、あるいはもともと社会に関わっていないものとして扱われている。エーデルマンはクィアな存在は一体どうなるのかという疑問に答えようとしている。クィアは、実現可能な政治的未来に向けたこの物語的運動に参加するどころか、未来のあらゆる実現、社会の内部、あらゆる社会構造や形態への抵抗に対する障壁を理解するためのものであるということがわかる。そして、(1)の「テクノロジーによる社会構成の変化」で言及したように、クィアな存在と非人間的なものを同一視するとなると、テクノロジーは出産及び再生産に影響を与え、異性愛主義的社会の対抗要素として用いることが可能である。

②非人間との共生社会の模索

アトウッドのマッドアダム3部作に登場する女性登場人物とヒューマノイドの関係を中心に分析した。『洪水の年』の主要登場人物であるトビーが可哀想な存在で終わる読みを一転させて彼女の持つ役割に言及した。トビーは、過酷な環境を生き抜くためにテクノロジーを利用せざるを得ない状況にある。しかしながら、壊滅的な世界の後にテクノロジーを活用している姿は今後のAIやフェムテック (Femtech = Feminine+Technology) と女性の関係を示唆している。また、トビーが滞在する神の庭師たちが生み出したエリアは、ハラウェイが提唱する人新世の考察のなかでも植民新生に該当する。ハラウェイは、かつて存在していた奴隷制時代の「プランテーション」の書き換えを行なっている。このプランテーションでは、あらゆる生物が人間と共存する環境である。これは神の庭師たちが築いたハイブリッドな生物と共生をはかる庭園に酷似している。クレイカーとトビーの関係は現代の人間とAIの関係、女性とAIの関係、AIの性別の必要性、そして代理母出産の議論に結びつく。マッドアダム3部作ではヒューマノイドとの出産もしくは再生産の描写が強調されており、ヒューマノイドたちは人間と共生しようとしている。つまり、マッドアダム3部作は、AIの再生産の不可能性というよりもむしろ、クレイカーと人間という異なる種族間の共生と子孫繁栄の可能性を提示している。

4. 研究者としてのこれからの展望

今後は、人間とテクノロジーの関係がより身近なものとして感じられるトピックに着目していきたいです。特に、出産とテクノロジーの関係はより一層深めることができる研究テーマであると考えられます。近年では人工受精とLGBTQの在り方が問われていることから文学作品でも英米を中心に描かれていることが多くなりました。テクノロジーとクィア (LGBTQ) の関係についての研究をさらに進めていく所存です。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は、本研究をご支援くださり深謝申し上げます。研究資金を援助していただけたことで、遠方で行われる研究会や学会への参加が可能となり、示唆に富んだ様々な発想や意見、研究者たちと出会うことができました。そして何よりも、英語論文の執筆の過程で、新たな研究目標を見つけることができました。これまではテクノロジーと女性というテーマのものと研究を進めていたのですが、時代の変化もあり、テクノロジーとクィア (LGBTQ) の関係についてもより深く研究する必要性に気づけました。改めて深く御礼申し上げます。

